



毎日もらえる追放特典で ゆるゆる辺境ライフ! 1

α L P H α L I G H T

水都蓮
Minato Ren

α **ライト文庫** 

アリシア

しづしづ
傷心のプライに
あつあつ
休暇を勧めた、
心優しき教会のシスター。

ライト

プライと付き合いの長い冒険者。
彼の追放に加担する。

ラピス

エルフの血を引く少女。
プライ達の窮地に
現れるが……

レオナ

才能豊かな魔導技術者。
辺境の村に
隠れ住んでいる。

セラ

プライの恋人の
はずが、
あっさりとして
乗り換える。

プライ

ギルドを追われた
お人好し冒険者。
謎のスキル
【ログインボーナス】で
人生が一変する。

エスティアーナ

通称エスト。
二千年前から
封印されており、
プライと運命的な
出会いを果たす。

Main Characters 登場人物紹介

第一章

「テメエは今日でクビだ。このクソ無能」

「えっ……?」

ある日突然、俺は所属するギルド【月夜の猫】のギルド長に呼び出された。

そして、一体何事かと思つたら、浴びせかけられたのは罵詈雑言と麦酒であった。

「お、俺がなにをしたって言うんだ」

最近の俺は、冒険者として思うようにステータスが伸びず、この男に命じられてギルドの予算管理を任されていた。だが、なにかやらかした記憶はない。

「なにをしたか分からねえってツラだな……アレだけのことをしておいて、自覚がねえのか?」

「待ってくれ。本当に何のことか分からない」

やったこととしては、無駄な経費が余りにも多かつたため、それらを削ったぐらいだ。

同種の武器や防具を別々の工房に二重に発注したり、そもそも納品された量が予定よりもずっと多かつたりと、随分とずさんな発注が行われていた。

このままでは要らぬ出費を繰り返し、経営破綻するところであった。その点はむしろ、感謝して欲しいぐらいだ。

「テムエの余計なお世話のせいで、来年から国の補助金が減らされんだよ!! このクソ低能が!」

……どうやらギルド長の怒りの原因はそこにあつたようだ。

「ギルド長、この前も言ったがこのギルドの経営状態は……!」

「黙れ!! テムエがそんな心配しなくていいんだよ。国からの補助金があればどうとでもなんだからな!!」

どうにかなるわけないだろう。

明らかに無駄な支出があつて、それを見逃していれば経営破綻まっしぐらだったのだ。

特に、ギルド員が申請する宴会費用が酷い。

補助金をあてに、誰も彼もが飲み代を申請して、タダ酒を啣ろうとしていたのだ。

それを予算管理の前任者——ギルド長なのだが——は咎めるどころか、自らも積極的に申請する有様だった。

おまけにギルド長が虚偽の収支報告をしていたものだから、本来貰えるはずのない額の補助金を受け取っていた始末だ。

これまでは国にバレないよう、証拠の残らない形で収支を誤魔化していたが、酒場周辺

でギルド員が散財するせいで国の監視の目も厳しくなってしまった。

今は知り合いの税務官に鼻薬を嗅がせて、お目こぼししてもらっているが、これももちろん贈賄、違法行為だ。

バレたらタダでは済まないし、彼らが本気でこのギルドを調査すれば、これまでだまし取っていた補助金の返還を命じられ、併せて罰金まで科せられてしまうだろう。

「とまあ、そういうことだ、ギルド長。これからは正確な収支報告をしないと、このギルドがまずい!」

俺はなるべくギルド長でも理解出来るように説明を試みた。

「うるせえ!! 難しい言葉連呼して誤魔化してんじゃねえ!!」

しかし、返ってきたのは耳をつんざくような怒号と投げつけられた灰皿であった。俺はそれをなんとかかわすも、灰が顔に掛かってしまう。

「ゴホッ……ゴホッ……!」

「クソが。飲み代の申請をなんでもかんでも却下しやがって……テムエが余計なことしなけりゃ、それで良かったんだよ。つーわけで、テムエはクビだ。さっさと荷物をまとめて出ていきな!」

「馬鹿な。そんな横暴……俺の仲間が許すはずがない!」

これは余りにも理不尽な解雇である。

俺の大切な仲間達ならきつと抗議してくるはずだ。

このギルドで最も付き合いの長い、槍使いライト。

おおおの
大斧使いのガルシア。

魔道士のレヴェナント。

そして、回復術士にして恋人のセラ。

彼らは俺のパーティー【ハテイ】のメンバーである。今は、一時パーティーを離れているが、それでもそれなりに長い付き合いの仲間達だ。

彼らなら味方をしてくれる、そんな淡い期待を抱く。

「ハッ、仲間か？ なら聞いてみるか？」

しかし、一方のギルド長は、にやにやと不敵な笑みを浮かべていた。

そして、声をかけると、部屋に誰かが入ってきた。

「ライト？ ガルシアにセラまで……どうして？」

それは今思い浮かべたばかりの仲間達であった。

レヴェナントはいないが、あいつは普段からなにを考えているのかよく分からないので、この場にはないの不思議ではない。

「アハハハハ。ブライ、麦酒に煙草の灰まで頭に掛けられて、随分と間抜けな格好じゃないか」

「そうね。随分と愉快な姿ね」

ライトとセラは、俺の姿を見ると大笑いし始めた。

いくら気安い関係とは言え、それは少し酷いのではないか。

「おいおい、開口一番でそれはないだろう!! それよりも、なんとか言ってくれよ。このクビは明らかに不当だ」

俺は仲間達に頼み込む。

みんなはその実力からギルド長にも信頼されている。

ライト達の言葉ならば、ギルド長も考えを改めるかもしれない。

「ガハハハ、そりゃ確かにクビにまですんのはやりすぎだな!!」

斧使いのガルシアは、事態をあまり深刻に捉えていないのかのんきなものだ。

「……ブライ、なにか勘違いしてないか？」

「え……？」

しかし、ライトから発せられたのは、期待とは異なる言葉であった。

「やれやれ、僕達がここに来たのは別に君を助けるためじゃない」

「な………？」

俺は、ライトの言葉に絶句する。

「おいおい、ライト。お前まさかこいつのことを……？」

「正直せいせいしてるよ。僕達がこつこつとステータスを上げてるのに、君だけはなににも上達しない。進歩がない」

「そうね、はつきり言って足手まといだったわ」

「な……」

ライトとセラの二人が口々に俺を非難し始める。

「レベルが上がってもほとんどステータスが伸びず、新しいスキルも習得しない。本当に無駄なレベルアップばかりだった」

「まったくね。そのくせ戦いじゃ役には立たないし、無意味に私達の経験値だけは吸ってくわで散々よ」

「ま、待てよ。お前達、いくらなんでも酷すぎる……」

確かにステータスの伸び悩みは、俺も自覚していた。

だが、だからってそこまで言うことはないだろう。

「酷いのは君の方だ。君の介護のせいで僕は高難易度のダンジョンには行けないし、君のために危機に陥ることばかりだった」

実際、彼らの足を引っ張っていたのは事実だ。

だからこそ、俺は後方に下がり、こうして裏方の仕事を担当していたのだが、それでも鍛錬は欠かさなかった。少しずつではあるが、最近ではステータスも上昇してきている。

それも全ては彼らに追いつき、もう一度共に冒険をするためだ。

それだけに、ライトの言葉はとてもショックであった。

「な、なあ、少し言いきりじゃねえか？ 確かにこいつは使えないかもしれないが、一応俺達の仲間じゃ——」

「ガルシアは黙ってなさい」

セラは冷たい声を発するとガルシアを黙らせた。

そして、ゆっくりと俺の方へ歩いてくると、鋭い眼光を向けてきた。

「セラ……お前もずっとそう思っていたのか？」

セラとは最近、彼女に告白されて付き合い始めた仲だ。

日は浅いが、それでも大切な存在だと思っている。

だからここでの言葉は彼女の本心ではないと、そう信じた。

「ええ、そうよ」

しかし、その希望はあっさり打ち砕かれてしまった。

「正直、こうなってくれて良かったわ。このままパーティに残られると気まずくて仕方ないから」

「気まずい……？ 一体、なにを言っているんだ？」

「察しが悪いね。こういうことだよ」

そう言って、ライトがセラの肩を抱き寄せた。

「な……ライト、なにをやっているんだ」

「なにをって、恋人とのスキンシップさ？」

「ガハハハハ、ブライ。テメエはまんまとツレを寝取られたんだよ」

しばらく様子を見ていたギルド長が、意地の悪い声で大笑いした。

あまりに残酷な仕打ちに、戸惑いと共に怒りが込み上げてくる。

「ふ、ふざけるな!! こんなのおかしいだろう。俺達ずっと一緒にやってきたじゃないか。それをこんな……こんな……」

「うるせえ、タコ!!」

怒鳴り声と共に、背後から頭をガツンと殴られた。

「かはっ……!!!」

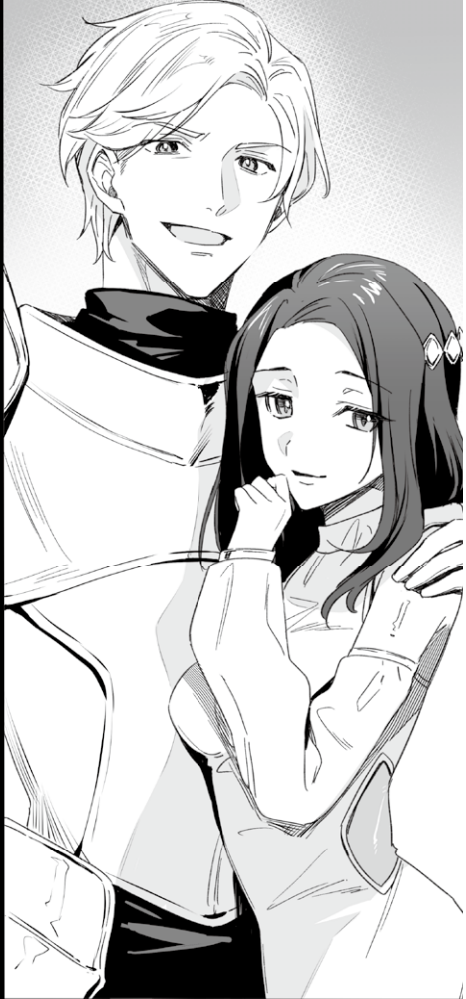
脳に耐え難い痛みが走り、同時に視界がぐらぐらと揺れる。

見るとギルド長の手に酒瓶が握られていた。呑んでいたそれで頭を殴打されたに違いない。

「テメエは冒険者としても男としても負けたんだよ。とっとと失せろ、カスが」

ギルド長がそう吐き捨てると、かつての仲間達がまた大笑いする。

惨めであった。悔しかった。



俺は俺なりに仲間達を想っていたのに、彼らにそんな感慨はなく、むしろ邪魔者を排除出来たという歓喜に沸いていた。

いや、彼らだけではない。

他の冒険者、受付、ギルド中の皆が俺をあざ笑っていた。

「っ……………」

俺は悔しさのあまり、その場から逃げ出すのであった。

*

行くあてもなく、俺は街をさまよい歩いていた。

「うう…………ちくしょう…………」

頭がズキズキする。

「クソッ…………なんで俺がこんな目に」

ギルド長め、なにも酒瓶で殴ることはないだろう。

ライトだって…………仮にも長い付き合いだって言うのに、あんな…………

「くそっ…………俺はギルドのためによかれと思つてやつたのに、あんまりだ」

様々な想いが去来して、むしゃくしゃが抑えられない。

殴られ、クビにされ、恋人を奪われ、嘲笑される。一体俺がなにをしたって言うんだ。

「仕事…………どうしよう…………」

なにより頭から離れないのはそのことである。

貯金はそれなりにあるが、それも保つのは半年程度だろう。なにか職を見つければ、い

ずれは路上生活だ。

「っ…………あ…………だめだ…………痛みが…………」

これから先に考えを巡らそうとしたら、意識がもうろうとしてきた。

応急手当はしたが、それでも脳の血管がどくどくと強く脈動するのを抑えられない。

そして俺は、徐々に意識を手放すと、その場に倒れ込んでしまうのであった。

*

「ご無事ですか？」

意識を取り戻し、まず最初に飛び込んだきたのは、美しい容姿のシスターであった。

彼女は心配そうに俺の顔を覗き込んでいた。

「……………天使だ」

思わずそんな言葉が漏れてしまう。

「もう、ブライさん。心にもないことを言わないでください……」
シスターは呆れたようにそう返した。

彼女……アリシアさんとは知己の仲だ。

いつも優しい微笑みを浮かべている、いかにも聖職者といった女性だが、今はその笑顔が傷心の俺に沁み入る。

「いや、本心で言ったんだ……」

「はいはい。その様子ならご無事そうですね」

本当に本心から出た言葉だったのだが、アリシアさんには本気と取られなかったのか、あっさりと受け流されてしまう。

どうやら俺は大聖堂の前で気を失ったようだ。

そして運がいいことに、こうしてアリシアさんに介抱されることになったわけだ。

「でも、本当に目を覚まされて良かったです。丸一日、眠り込んでたんですよ？ 私、心配で、心配で……」

「丸一日……？ そんなに眠り込んでたのか？」

ギルド長の一撃が相当効いたのだろうか。

「それで、ながあったんですか？ 頭にこんな酷い怪我を……治療術が効いて良かったんですけど」

「そうか、アリシアさんがこれを」

いつの間にか頭の怪我が癒えていた。

まだ、多少の痛みはあるが、気を失う前に比べれば随分と楽になっている。

「実はギルドをクビになって……」

彼女なら信用しても大丈夫だろう。

俺は昨日の出来事を彼女に伝えた。

「ひ、酷いです!! どう考えてもブライさんは悪くないのに」

すると、彼女はまるで我がごとのように怒ってくれるのであった。

「みんなもそんな風に俺を庇ってくれていたらな」

去り際に見た、メンバー達的笑顔が脳裏に浮かんだ。

彼らには、かつての仲間への同情や惜別など欠片もなく、あったのは嘲笑ばかりだった。

「なにかあったら我が教会はどんな協力も惜しみませんから、いつでも頼ってくださいね。

なんなら……一緒に聖職者の道でも……」

「聖職者の道……?」

随分と突拍子もない提案だ。

「い、いえ……なんでもありません。忘れてください」

教会は人手不足なのだろうか。

この大聖堂を見る限り、十分足りているように見えるが。「そ、それよりも、先ほどから気になっていたのですが、その左の手のひらにある傷はどうしたんですか？」

「傷?」

言われて、手のひらを見てみる。

すると、そこには十字傷のようなものが刻まれていた。

なんだこれは。身に覚えがない。

「まるで聖痕のようですね。頭に衝撃を受けて、なにかに目覚めたのかもしれませんが」

「はは、そんな都合のいい話が……」

俺はなんとなしに、自分のスキル欄を呼び出してみる。

自分の潜在能力をリスト化して空間に投影する魔法だ。

——スキル【ログインボーナス】が解放されました。

すると突然、脳裏に無機質な音声響き渡った。

そしてスキルの欄には【ログインボーナス】という見たことのない文字列が記されていた。

「ってなんじゃこりゃあ!」

俺は驚いて大きな声を出してしまう。

「どうしましたか?」

「ほ、本当にあつたんだ。見慣れないスキルが。昨日までこんなのがなかったのに」

「どんなスキルですか?」

「【ログインボーナス】って書かれている。知ってるか?」

教会といえは、冒険者のスキル解放を行ってくれる施設だ。

彼女に聞けばなにか分かるだろう。

「もう、ブライさん、そんなスキルは聞いたことありませんよ。からかうのもいい加減にしてください」

「いや、ほんとなんだって」

少し強引だと思ったが、俺はアリシアさんの手を引くと、展開したステータスを見るように促す。

「ひゃっ!? ブライさん!」

基本的に他人のステータスを覗き込むことは不可能だ。

しかし、本人が自ら触れた者であれば、その間ステータス画面を見ることが出来る。

「あ……ほ、本当にありますね。ログイン……? 一体なにを表しているのでしょう」

「分からない。聞いたことのない言葉だし、効果も分からない」

俺は試しに手に入れたばかりのスキルを実行してみる。

——ようこそ、ブライ様。スキル「ログインボーナス」が解放されましたので、初回の特典をお送りいたします。

無機質な音声がそう告げたが、やはり意味が分からず首をひねる。

「特典……?」

しかし、しばらく待ってもなにかが起る様子はない。

「うーん……これはユニークスキルのようですね」

「ユニークスキル?」

「スキルというのが、女神様からの恩寵だというのはご存知ですよね?」

「子供の頃に習った気がする」

実際のところはどうか知らないが、スキルが与えられる仕組みが解明されているわけではないので、神の御業によるものという考えも、おかしくはないだろう。

「大抵のスキルは、教会でスキル授与の儀を行うことで開花し、その時にスキルの名前と効果の情報も得られるのが普通です。しかし、中には効果が不明な固有スキルが紛れ込むことがあります」

確かに聞いたことがある。

剣を扱う冒険者は通常【剣術】というスキルを身につけているもののだが、飛び抜けた才能を持つ者の中には【魔剣士】や【剣聖】といった特別なスキルが与えられる者もいるという。

そういったユニークスキルを持つ者は珍しいものの、それでも存在しないわけではない。俺を追放したライトなどは【槍聖】という特別なスキルを持っていた。あれもユニークスキルの一種だ。

「ですが……【ログインボーナス】というのは聞いたことがありません……」

「アリシアさんが知らないって……そんなことあり得るのか?」

教会は常にスキルの授与に立ち会い、ユニークスキルの情報収集を行ってきた。

その教会に所属するアリシアさんが知らないスキルなど、そうあるものではないだろう。そうなる可能性としては……

「ブライさん、きっとそれ、新種のスキルですよ」

「新種?」

「ええ。ごくごく稀に、これまで全く聞いたことのない未知のスキルを授かる人がいるのです。本当に数百年に一人という割合ですけど」

「未知のスキル……俺が?」

意外であった。

自分で言うのもなんだが、俺は自分のことを凡人だと思ってる。

【剣技・D+】に【雷撃魔法・C】、それらが俺の授かったスキルの代表だ。度合いとしてはそれぞれ平均やや下、平均程度という凡庸なレベルだ。

一方で俺のレベルは既に74——冒険者の平均レベルを優に超え、ベテランの水準に片足を踏み入れている段階であった。

レベル帯に鑑みれば、俺のスキル習熟度はだいぶ劣っている方なのだ。才能がないという評を下しても良いだろう。

「それなのに特別なスキルなんて授かるものなのだろうか？」

ふと、疑問が口をついて出る。

あまりに現実味がなかった。こんな俺みたいな人間に、数百年に一人という新種のユニークスキルが授けられるなど、不相応な話だ。

「ブライさん……」

そんな俺の卑屈な心境を悟ったのか、アリシアさんが心配そうな表情でこちらを覗き込んできた。

「ブライさん、酷い傷を負わされたことですし、今日はゆっくりとお休みになった方がよろしいのでは？ 帰るところがなければ、私が面倒を見ても……」

「それって、もしかして同棲の提案……」

「ち、違います!! ヒモの面倒を見るようなもので、断じて、ど、どう、同棲なんかじゃありません」

「ヒモの面倒を見る方が、社会的に問題がありそうな気がするのだが……」

「そうか。とにかく、気を遣ってくれてありがとう。俺は大丈夫だから、もう行くよ」

一人になって少し気持ちを整理しよう。

スキルのこともそうだが、元パーティのことやこれからのこと、問題は山積みだ。

俺は彼女の勧め通り、休養をとることにした。

*

翌日、俺の自宅に、一通の手紙が届けられた。

『おめでとうございます。あなたは新スキル「ログインボーナス」に目覚めました。こちらは初回の特典となります。』

「なんだこれ……」

そこに同封されていたのは、赤線で道順が示された地図と、権利証と書かれた書類であった。

「外は一層冷えるな」

妙な手紙を受け取った翌日、俺は白い息を吐きながら、駅のホームで一息ついていた。売店で買った、トマトのしつとりとしたスープが身に沁みる。

「あれが温泉街ノーザンライトか」

俺はホームから遠くへと目をやる。

そこには吹雪の中、うつつすらと浮かび上がる巨大な城塞都市があった。

「綺麗な光景だな。アリシアさんの言う通りにして良かった」

——先のこととは不安でしょうけど、今は少し休暇を取られてみてはいかがでしょうか？ 三日前の件で傷心の俺を見かねたアリシアさんは、そんな提案をした。

旅行をする心の余裕などないと思っただ、いざ知り合いのいない地へ出掛けるとなると、

鬱屈した気持ちもいくらか晴れた。

さすがは聖職者、アドバイスには従ってみるものだ。

さて、俺がこれまで活動していたのは、大陸北西部にあるエルセリア王国王都、スノウウイングである。

その名の通り寒冷地に築かれた街であるため、十月の初めだというのに雪化粧をしていた。

しかし、俺が今から向かうノーザンライト地方のとある村は、その王都よりも更に北に

ある、極寒の地である。

徒歩で向かうには遠すぎるが、グリューネ大陸鉄道の魔導列車を利用すれば数日の距離を離だ。

ただ、厳しい寒さのために、列車は定期的に停車をして、雪除けの魔法を掛け直したり、魔導機関のメンテナンスを行ったりしなければならぬのが難点だ。

俺はメンテの影響で蒸気を発する先頭車両を横目に、駅で購入した魔導式のカイロを懐に忍ばせると、寝台列車の一室に入り込んだ。

「本当に豪華な車両だな……」

俺が乗り込んだのは一等車両である。

一車両の半分を一つの客室に利用した豪華な車両で、往復で乗れば俺の給料の数ヶ月分が吹き飛ぶほどだ。

貴族や大商人御用達の車両のため、本来なら俺のような者には無縁な空間である。

「口利きをしてくれたアリシアさんに感謝だな」

そんな俺でも一等車両に乗れたのはアリシアさんのお陰である。

彼女は俺のことを相当心配してくれているようで、今回の旅行についてもなにかと手を貸してくれたのだ。

「お土産、しっかり買っていかないと」

セラにはあのような振られ方をしただけに、今はアリシアさんの優しさが身に沁みる。必ずこの恩に報いねば、と俺は心の中で誓う。

「さてと、ここからノーザンライト駅までは丸一日か」

グリニューネ大陸鉄道、北の終着駅が、先ほど遠くに見えた温泉街ノーザンライトである。といつても、温泉街というのは古い呼び名である。

年中、吹雪で荒れる極寒の地で、元々は温泉資源と観光事業によって発展してきた街である。

しかし、数十年前にマナタイトと呼ばれる、魔力を持つ鉱石が発掘されるようになったお陰で、街の様子は徐々に変化していった。

今ではマナタイトの研究が盛んに行われ、吹雪を遮る結果が街の一部を覆い、最新の魔導具があらこちらで稼働する夢のような街である。

「帰りがけには街の観光つても良いかもしれないな」

実は、今回の目的地は、都市の方ではない。

そこからまたかなりの距離を移動して到達する、大陸の端だ。

昨日俺の元に届けられたのは、北の端を示す地図と、その土地の権利証であった。

送り主は記載されておらず、怪しいことこの上ない贈り物だ。

しかし、手紙には俺とアリシアさんしか知り得ない、【ログインボーナス】というスキ

ル名が記されていた。

おまけにアリシアさんの術でも追跡出来ないほどに、送り主の痕跡は嚴重に抹消されていたのだ。

これらのことが決め手となり、俺はこの地図の場所へと向かい、直接真意を確かめることにしたのだ。アリシアさんから旅行を勧められたのもあって、良いタイミングだったとも言える。

「とはいえ、どうやって向かったものか……」

北国には、通常の馬よりも一回り大きく屈強な馬が生息している。

軍馬としても輸出されているそれらを借りられれば、道中もなんとかなるのだろうが……

「まあ良いか。とりあえず向こうに着いてから考えよう」

そうして俺は眠りに就いた。

久々にゆつくりとした時間が送れる。

そう思うと、気が抜けて一気に眠気が押し寄せてきた。

*

いつの間にかぐっすり寝入ってしまった。気が付けば昼過ぎとなり、列車は目的のノーザンライト駅に着いていた。

「素晴らしい寝心地だったな……」

庶民の俺にはもったいないぐらいの贅沢さだ。到着まで完全に意識が飛んでしまっていた。

「魔導研究の盛んな街とは聞いてたが、こうして駅の周りを見ると、街並みは伝統的だな」

この都市は三層に分かれていて、ここは最下層にあたる。

かつての温泉街としての姿がほとんどそのまま残っているようだ。

「ああ、あなたが最後の乗客ですね。確かブライさんですね？」

「え、ええ」

ノーザンライトの街並みをホームから堪能していると、駅員に呼びかけられた。

駅員なのだから利用客の名前を知っていて当然だろうが、一体何の用なのだろうか。

「いやあ、良かった。実はブライさん宛に贈り物が届いて……」

「贈り物？」

不思議に思いながら、駅員の案内に従って駅を出る。

すると、俺が通されたのは駅の近くにある厩舎であった。

「これは……?」

そこには雄々しく美しい肉体を誇る、漆黒の馬が佇んでいた。

「良い馬ですよ。ここでは馬車の管理もしてますから、それなりに馬を見る機会が多いのですが、その中でも彼はとびきりの肉体の持ち主ですよ」

「確かに良い馬ですね」

こんな上等な馬がいれば、厳しい北の雪原の旅も楽になるだろう。

とはいえ、まさかこの名馬が贈り物というわけではないだろう。

「それで、贈り物というのは？」

「ええ、この名馬ですよ。誰からの贈り物かは分かりませんが、ブライさん宛に届いていましたので」

「いやいや、待ってください。本当にこんな立派な馬が、俺宛に?」

「はい。『スノウウイングから来たブライ』と書き記されていましたからね。乗客の中で該当するのはブライさんだけですよ」

そうして、俺は駅員に手紙を渡される。

確かに、宛名には俺の名前が記されている。

「外に馬車も保管してあるので、確実に取りに来てくださいね」

「え、あ、ちよっと……」

困惑する俺を置いて、駅員は去って行く。

「贈り物って一体誰から？」

俺は手渡された手紙に目を通す。

『二日目の特典をお送りします。今後の旅路が良きものとなりますように』

昨日届いた手紙と同じ封筒が使われていた。

どうやら同じ送り主のようだ。

「一体どういうことなんだ」

突然目覚めた【ログインボーナス】というスキル、その効果なのか俺には「特典」とや
らが届くようになっていた。

これはいたずらなのか、それとも本当に女神の恩寵なのか。

俺の行動を読み、先回りして送っているのか……なんだか不気味だ。

「一体、俺はなにに巻き込まれているんだ？」

突然解放された謎のスキル、俺に届くようになった謎の品、理由も経緯もなにかも分
からない。

「とはいえ、貰えるというのならありがたく貰っておくか」

得体が知れなくても、目の前の馬が良い馬だというのはよく分かる。

正直、疑問は尽きないが、今は深く考えずに、馬と馬車を貰い受けることにしよう。

*

温泉宿で一泊した翌日、俺は件の手紙に記された土地へと向かうことにした。

さて、いくら良質な馬と馬車とはいえ、この先はろくに整備もされていない雪原だ。

軌えを満たす術は十分すぎるほど用意すべきだろうし、御者を俺が務める以上は寒風へ
の対策は必須だ。

俺は街の雑貨屋で防寒具や食料をありったけ購入して、万全の準備を整えるのであった。
しかし、ほとんどの備えは杞憂に終わることとなった。

この漆黒の名馬は大変賢く、なんと地図を見せるだけで瞬時に目的地と道順を理解した
のだ。北の地方の馬は上質なことではあるが、頭がいいにも程があるだろう。

降り積もる雪を物ともせずに蹴散らしながら、馬は目的地に向かって雪原を突き進んで
いく。

そのお陰で俺は、馬車の中で楽にくつろぐことが出来ている。

「それにしてもこれだけ吹雪いているのに、中はかなり暖かいな」

馬車の方も上等な代物であった。かなりの広さと豪華さで、仮眠が取れるようなスベ
スまでしつらえられている。

しかしなにより特徴的なのは、複数の魔導具が設置され、風よけと温熱の効果が施されていることだ。なんとも居心地の好い馬車だ。

「この中で暮らしてもいいぐらいだな」

金に困って家を追い出されたらこれに住もう。

そんなことを考えながら俺は馬を走らせる。

今俺が通っているのはノーザンライトの遙か北にある、エイレーン村への道なのである。先ほども言ったが、ここには街道らしい街道が整備されておらず、ただ雪原が広がるばかりである。

しかし、厳しい環境にありながら、馬はほとんど休みなく走り続けている。

並の馬なら、地面に積もった雪に足を取られてうまく進めないだろうし、体力の消耗も激しかっただろうが、この馬からはわずかな疲れも見取れない。

「このペースなら、明日の昼には着くかもしれないな」

簡易テントにカイロ、食料品と万全の備えこそしたが、この馬の体力ならばそれほど気を揉む必要はなかっただろう。

俺は馬に感謝しながら馬車の中で横になる。

「本当に至れり尽くせりだな」

随分と酷い目に遭ったものだが、突然権利証とやらを貰って、昨日は道を進むための足

まで貰った。

こんなにも面白い話があるものだろうか。それだけに警戒もしてしまう。

何の代価もなくこんな良い思いをするなど、なにか裏があるのではないだろうか、と。

「ま、それは村に着いてからだな」

依然として気になることはあるが、答えが出ないのならあれこれ悩んでも仕方がない。

俺は持ち前の楽天主義を少しづつ取り戻し始めていた。

「さて、そろそろ馬を止めて夜を明かすか」

いつの間にか日が暮れ始めていた。

屈強な名馬ではあるが、随分と長いこと走らせ続けていたのだ。休息は必要だろう。

俺は風の避けられそうな洞窟を探し当てると、そこに馬車をとめて夜を明かすことにした。

「人や魔獣がいる気配はなし、と。普通なら火をおこして暖をとるところだが、この馬車の中で過ごすならそれも必要だろう」

俺は馬に外套をかけてやると、携行していた干し肉を取り出し、腹を満たすことにした。

「しかし、広い洞窟だな」

偶然見付けた場所だが、奥は思ったよりも広々としているようであった。

腐っても冒険者、俺は好奇心に駆られて、洞窟の奥を探索することにした。

「これは……先史文明時代の遺跡だろうか」

さて、奥へ奥へ進むと、そこには高さ10メートルはあろうかという立派な扉が、洞窟に埋め込まれたように鎮座していた。

未知の石材で構築された白亜の扉、それはずいぶん古い時代のものだった。

「仕事柄よく見かけたけど、この時代の遺跡は誰も扉を開けたことがないんだよな」

先史文明時代の遺跡には物理的な施設がされておらず、魔導機構によってロックが施されている。

しかし、未だそれが解析されたことはなく、この扉の向こうに存在するものを知る者は、誰一人としていない。これも、仮に周囲の岩盤を破壊出来たとしても、奥にある遺跡の壁までは破ることが出来ないだろう。

「遺跡はあったが、探索はここまでか」

解錠方法が分からない以上は探索のしようがない。俺は馬車に戻ろうと引き返す。すると……

——**エイレーンの加護を確認しました。資格者と認め、封印錠を解錠します。**

無機質な音声と共に、巨大な扉が開かれていった。

「嘘だろ……」

人類の長い歴史の中で一度も開かれたことのない遺跡が姿を露わにする。

俺は歴史的な瞬間に立ち会っていた。

扉の向こうに広がっていたのは、現代とはまるで趣の異なる、紺碧の空間であった。

壁や床はつるつるとしていて、それでいて俺の知るとの材質よりも硬い。それだけでもとても興味深い。しかし、それ以上に気になるのは……

「……これは氷か？」

扉の向こうにあったのは、凄まじい冷気を放つ巨大な物体であった。

不純物の欠片もない美しく透き通った氷、それが扉の向こうで鎮座していたのだ。

「なんて綺麗なんだ……」

しかし、俺がなによりも目を奪われたのは、氷の中で眠る少女であった。

透き通るような美しい銀の髪、まるで絹のように濁りのない白い肌、人間離れた美貌の持ち主がそこにいた。

「いや、待て……人!? なんでこんなところに……」

ふと我に返る。

その美しさに思わず見とれてしまったが、氷の中に少女が閉じ込められているなど、只事ではない。俺は少女を助けようと、慌てて氷を砕きに掛かる。

ところが——

「はあ……はあ……ダメだ、びくともしない」

近くの石を手にして何度も叩き付ける、それが駄目ならと腰の剣で、魔法で——俺はありとあらゆる方法で、氷の中から少女を助けようとした。

しかし、石は砕け、剣は折れ、魔力が尽きるほどに攻撃を加えたにもかかわらず、氷は傷一つつかなかった。

「一体どうすれば……」

恐らくただの氷ではない。

高度な魔法の技術で生成されており、しかるべき方法で解呪しなければならぬのだらう。

しかし、そうになると、俺の貧弱な魔力ではどうしようもない。

俺は解呪の方法を必死に思索する。

「力もない、魔力もない、そんな俺だがなにか出来るはずだ……」

国を頼るか？

幸い、近くには魔導研究で栄えたノーザンライトがある。

だが、果たして今の技術でこの氷を溶かせるのだろうか。

教会？

彼らの中には解呪に長けた者も多い。教会に蓄積された知見が役に立つかもしれない。

「だめだ、時間が掛かりすぎる……」

この少女は一体いつからこんな目に遭っているのか。

昨日今日の出来事なのか、数ヶ月か、数年か、それとも……

呪いに疎い俺にはなにも分からない。

だが、彼女をこのままにしておくわけにはいかない。一刻も早く、助けてやらねば。

「とはいえ、俺になにが……」

俺にはなにもない。

力も魔力もスキルも……

「スキル……？」

いや、もしかしたらこの状況を打破出来るかもしれない。

薬にも縛る思いで俺はスキルを発動させた。

【ログインボーナス】——得体の知れないこのスキルのことを、俺はまだ理解していなかった。

なぜ俺にだけ使えるのか、どんなものが貰えるのか、どんな経緯で貰えるのか。ただ確かなことは、このスキルによって俺は便利なものを得られるということだ。

それなら、今彼女を救えるなにかを出してくれ、俺はそう願うのであった。

——エイレーンの地への到着を確認しました。「ログインボーナス」の機能を解放し、本日の特典300マナを抽出します。

すると、無機質な音声と共に、突然周囲がぼうつと蒼白く光ったかと思うと、淡い光が俺の中へと吸い寄せられていった。

「なんだこれは……?」

「ログインボーナス」

利用可能マナ：300

——任意の特典をお選びください。

今までとは明らかに異なる表示だ。

これまではスキルを発動させようとしてもなにかが起ることはなく、勝手になにかが贈られてくるのみであった。

「この特典ってのは自分で選べるのか?」

——新規アイテムの開発、既存のアイテムの複製、経験値の獲得、ステータスの上昇、装備への付与など、なんでもお選び頂けます。

「ログイン」というのがなにを指しているのかよく分からないが、ボーナスと言うだけあって、任意の特典が得られる仕組みのようだ。

「なら、この呪いを解くためのアイテムを貰うことは出来ないか?」

——既存のアイテムの複製なら可能です。解析のために、該当のアイテムを提示してください。

無機質な音声と共に、目の前に淡い光がぼうつと浮かんできた。

それはゆつくりと収束していくと、正八面体の不可思議な物体へと変化していった。

「いや、同じものが欲しいわけじゃなくて、新しいアイテムが欲しいんだ」

——申し訳ございません。新規アイテムを希望される場合、生成されるものはランダムとなっております。

必ずしも、万能というわけではない……か。

とはいえ、呪いのスキルを持ち合わせていない以上は、その【開発】とやらを選択するしかないさそうだ。

「いちかばちかだ。その新規アイテムの開発を頼む」

——消費マナに応じて、生成されるアイテムの質が変わりますがどうされますか?

マナというのは、貨幣のようなものだろうか。先ほど300付与されたということは、恐らくその中でやりくりしてアイテムを貰えば良いのだろうか。ならば、ここは出し惜しみなした。

「全部だ」

——かしこまりました。300マナを消費して、新規アイテムを開発します。

